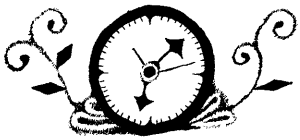
子ども時代と私(9)

疎開先で

小宮山洋夫

社会に出てからぼくは、特定の組織やグループに属することを避けて来た。以前からこの志向性の形成は、子ども時代、とくに疎開先での学校生活と多少とも関わりがあると思っていた。

ぼくは昭和十年、東京の馬込で生まれた。昭和十六年、大阪で小学校に入学、この年に日本は、太平洋戦争に突入している。次いで関門海峡を渡り、九州福岡で二年生にすすんだ。福岡の小学校については、近所の仲間三人で、学校に行かず、通学路の途中にかかる橋の下で、弁当を食べ遊んで帰っていたところ、一週間ほどで発覚して、怒られたことが、懐かしく思い出される。三年生でまた、東京の生地近辺に戻り、馬込第一小学校に



入った。

やがて、東京空襲が始まり、四年生のとき、学校は馬込に駐屯する軍隊の宿舎になり、無期限に閉鎖された。その少し前、地方に集団疎開する生徒たちを見送っている。田舎に縁故のある者は近いうちに疎開するという条件で残留した。天下晴れて学校に行かなくてよい事態に直面して、ぼくは、手放しにうれしく、解放感に浸った記憶がある。

それからは毎日のように、昼間は、大空にB29の編隊を眺め、夜は空襲による火災で真っ赤に染まる空を眺めて過ごした。どちらも美しい風景だった。日本軍も地上から高射砲をドーン、ドーンと打ち上げていたが、高空を飛ぶ飛行機にはとどかなかった。とくに空襲の激しい時は、京浜国道沿いの崖に掘られた防空壕へ避難したが、わが家の周辺は焼けなかったこともあり、戦中期のそれらの事象について、とくに怖いという印象を抱いた覚えはない。休校の期間は、むしろ、ぼくにとっては、ハレの日々だったといえよう。

昭和十九年の早春、見渡す限り焼け野原の東京を後に、信州の沓掛（現中軽井沢）の親戚の家に疎開した。転入した小学校は軽井沢と沓掛の中間にあった。おそらく軽井沢地区唯一の小学校だったと思う。

同じクラスの中に疎開組が四～五人いた。転入した次の週あたりから、ぼくは殴られだした。疎開組は毎日一人ずつ交代に、学校の帰り道、地元の子どもたちから、集団で殴られていたのだった。月曜日は○○、火曜日は××、水曜日は小宮山というように。ぐるっと輪状に取り囲み、いっ

せいにポカポカ殴るのである。そして輪を解くと、さっと散るようにそれぞれの方角に帰っていく。暴行の時間は瞬時といえるほどのもので、その間、終始無言だった。それがほとんど毎日つづくのである。異文化との出会いに圧倒されたものの、対象は疎開者全員と民主的だったためか、精神的ダメージはさほど大きくなかった。

反撃の方法を思いめぐらせているうちに、体育の時間に相撲大会が催されることになった。不思議なことに、疎開組はみな強く、地元の子どもを次々と倒した。「東京の子は柔道の技を使うからズルイ」と異議を申し立てる者があった。けれども、先生は黙していた。それ以降ぷっつり、学校帰りのいじめはなくなった。

そのうち、子どもたちは親から「いじめてこい」といわれていることが判った。親戚の叔母が、「親がそんな事をいうなんて困ったもんだ」とつぶやいていた。この言葉を自分がどう受けとめたかは、覚えていない。

こういう大人の階層の、東京人に対する姿勢は、近代日本が変態させた軽井沢の特殊な土地柄によるのだろう。平時、土地の人の多くは、冬の間の空き別荘やゴルフ場の維持、管理、その他雑多な下仕事など、別荘族の優雅な生活に関わることで、多少の現金収入を得て生活をしのいでいた。自我の均衡を保つために、無意識のうちに、仕返しを内在化していったのだろう。それが、疎開者を迎えたことで、顕在化したのだった。別荘族とは何の関わりのない、ぼくたち疎開組は、と

んで火に入る夏の虫となった。

疎開して半年足らず、その年の八月十五日戦争は終わった。その節目を象徴したものは、担任の先生が生徒を殴るのを止めたことだ。

間もなくわが家は、信越線で沓掛から三十分ほど下った上田という小都市へ移り住んだ。住居は郊外の街の中心からかなりはずれた、千曲川のほとりにあった。ぼくは上田としては農家の子の多い東小学校に転入した。入学して以来、五つ目の小学校だった。

ぼくは、軽井沢での体験から、新しい学校に恐れを抱いていたと思う。転校という事件は、常に緊張を強いる。自分がこれまで身につけた意識がどれほど通じるか、新世界の共同観念をどれだけ理解し、受け入れることができるか。

入学当日の下校時、同じ地域に帰る四、五人の一団から、自分たちについてくるようにいわれ、いっしょに帰路についた。そこは、集落の寄り集まっているが、背後に田畑が広がっている、踏入という名の、もうほとんど農村といってよい地域だった。ぼくは一団の中のMの家に連れていかれ、いっしょにイモを食べたり、雑談したりした。Mは一団のボスだった。どうやら、その会食で、ぼくは四年一組の踏入地区の成員として認知されたようだった。Mは、踏入地区共同体のボスにとどまらず、クラス全体のボス的存在だった。おだやかな人柄で言動も普通なのだが、何かしら威厳があるように見えた。取り巻く子どもたちの、王に対する臣下のような態度が、そういう雰囲気を醸成していたのかも知れない。Mはしか

し、よく出来た人物だったと思う。クラスの中でいじめやトラブルが皆無のはずはないと思うが、全く覚えていない。とにかくおだやかなクラスの印象が強い。Mの存在が大紛争の抑止に大きく働いていたのかもしれない。

通過儀礼を経たのちも、地区共同体にとくに縛られることもなく、クラスの中でも、客人として処遇され、卒業するまで心地よく過ごすことができた。

五年生に上がった時、クラス替えがあった。新しいクラスには、Mはいなかった。そこではそれまで全く目立たなかったOがいつの間にかボスになっていた。とはいえその及ぶ範囲は限られていた。女子はもちろん、男子の半数以上も、権力の拉致外にあった。それでも、その及ぶ範囲でのOの威力は絶大だった。配下はボスの一挙一動にそって去就をきめていた。

ところがある日、突然、配下の一人Sが、机のふたで、Oの頭を殴りつけるという事件が起こった。Oの頭は血が滲んでいた。そこに至るまでの経緯はぼくには不明だった。安定型のボスとしての、則を越える振る舞いが、引き金になったかも知れない。この一件で、今度はSが王座につき、卒業まで続いたような気がする。

新制中学として二年目の上田第一中学校へすすんだ。この中学校は僕の出身の東小学校と街中にある南小学校の卒業生からなっている。前述のように、東小学校の区域は農家が多い。次いで職人

の家庭が目につく。これに対し、南小学校は、商家、サラリーマンが大半を占めている。その風土を反映して、東校では封建的ヒエラルヒーを好んでつくる。一方、南校生は、個人主義的色彩が強い。それでいて、東校生に対面したことで、結束を固めたように見えた。互いに異界の人として、かなり長い間、一定の距離を保っていた。

ぼくはといえば、中途半端な心地ですごしていたように思う。もともと疎開者として、東小学校の共同観念はきわめてわずか身についたに過ぎず、一方、南小学校の感性は東京に通じるものがあったにもかかわらず、南校生の、暗黙のうちに東小学校出身者を避ける姿勢に、一歩踏み込み関わることが躊躇された。それで、ホームルームで珍奇な発言をしてみせるなど、いま、振り替えると恥ずかしい振る舞いを時折しながら、しばらくの間、境界で傍観者をつとめていた。

一年目の秋、サッカーをやろうということになった。しかし、サッカーボールがない。そこで、東小学校の領域の田んぼへみんなで出かけた。イナゴを取り、それを売ってボールを買おうというわけである。イナゴはたくさん取れ、ボールを手に入れることができた。当時としてはサッカーボールは、かなり高価なものだったのである。

それからは、ほとんど毎日、放課後、校庭に出て、陽が沈むまで、ボールを追いかけ蹴とばして遊んだ。この時間、東校、南校の意識は消えていた。強いられた授業に耐えて、硬直した心身は、指図のない、決まりもいいかげんな、手づくりの

サッカーによって解きほぐされた。「もう、帰れ」と先生に怒鳴られて、家路についた。

当時はすでに、野球全盛の時代に入っていて、いつも、校庭の二～三か所で、他のクラスや学年の群れが野球を興じていた。サッカーを選ぶのは、ぼくたちのクラスだけだった。校庭では野球と交錯して、小さなトラブルは絶えなかった。しかし、それを乗り越え、しつこくサッカーをつづけた。学校公認の野球部も誕生していた。体育の怖い先生がその監督をつとめ、管理していた。野球部の練習がある時は、他の群れも含めてだが、校庭から強制的に排除された。ぼくたちは、学校権力と野球部をささえる生徒たちの共同意志を罵倒して、憂さをはらすしかなかった。それ以来、ぼくは野球嫌いで通している。

ぼくたちは、ただ、ぼうっと突っ立っていることの多い野球なんか、スポーツじゃない、みんなが絶えず動きまわるサッカーこそ、本当のスポーツなのだ、という共通認識に達していた。東校、南校という出身小学校への帰属意識は、この観念の共同化で薄れていったと思う。

このような度重なる転校体験は、ぼくをしてフリーに固執する姿勢を強いる一方、遊びの共同体の魅力を知らしめた。年を経てから、度々、サッカーチームをつくろうと、真剣に考えている。いまだ実ってはいないけれども。ここ二十年来、箱の中という小さな畑で、野菜をつくりつづけているのは、基本的には東小学校の農村文化圏に、身を置いていたことによる。

（家庭菜園研究家）